

育て親家族におけるテリングの効果についての探索的検討

富田 庸子（児童学科・准教授）

Exploratory Study of “Telling” in Open Adoptive Family

Yoko Tomita

Abstract

“Telling” is the continuous effort by adoptive parents to make their adopted children aware of the presence of their biological parents and their roots.

I conducted home visit interviews with the adoptive mother and explored variations in telling practices by adoptive parents and considered, from a developmental perspective, their child’s understanding of the existence of biological parents different from the adoptive parents.

The main findings were as follows: (1) “telling” practices by adoptive parents change from one-way to reciprocal communication as the child’s abilities grow; (2) the adopted child’s experiences of having younger siblings or meeting with the birth mother motivate the child’s own understanding of the content of “telling”; (3) there is a certain period in which the adopted child dislikes “telling”, and (4) the more the adopted child becomes sensitive to the “acknowledgment” of his/her being different from others, the more social attitudes become complicated.

Key words : Telling, nonbiological family, adoption, self-understanding, understanding of parent-child dyad

キーワード : テリング、非血縁家族、養子縁組、自己理解、親子関係理解

1. 研究の背景

1) オープン・アダプション

血のつながりのない幼い子どもを迎え育てる養子縁組のあり方は、育て親家族と産みの親との間のオープン性（openness）の観点から、クローズド・アダプション（closed adoption）とオープン・アダプション（open adoption）とに大別することができる（Grotevant, 2000）。クローズド・アダプション（あるいはコンフィデンシャル・アダプション；confidential adoption）は、子どもの

出自についての秘密厳守と匿名性を強調した縁組であり、育て親家族と産みの親とはいわば縁が切れた状態で、コミュニケーションが一切行われない。オープン・アダプションは、縁組成立後も育て親家族と産みの親との間に何らかのコミュニケーションが継続する縁組で、最近ではコーオペラティブ・アダプション（協力的養子縁組：cooperative adoption）とも呼ばれている。実際のコミュニケーションの程度は三者（産みの親、育て親、子ども）の要望に合わせて決められる。オープン性が最も

高い縁組は“完全に開示された”縁組（fully disclosed adoption）と呼ばれ、三者間でお互いを訪問したり、電話やメール、手紙で連絡を取るなど、様々な交流が直接的に行われる。これよりもオープン性が低いのが“第三者を介して開示される”縁組（mediated or semi-open adoption）で、産みの親と育て親家族とは、直接ではなく、縁組の仲介をした機関スタッフや代理人など第三者を通して交流を行っていく。

毎年10万人を超える養子縁組が成立するアメリカにおいても、1970年代まではクローズド・アダプションが主流であった（桐野、1998）。縁組に関わる事実を一切明らかにしないことが子どもと育て親との絆を作り上げるために重要であるとして、「迎えた」事実そのものを隠す傾向もあった。しかしこのような縁組においては、子どもが成長するにつれて、自分の生い立ちに感じた疑問を明らかにされなかったり、事実を突然知らされたりすることによって生じる育て親への不信任感、「自分は何者か」という問いへの回答が不明確であることによるアイデンティティ形成不全、病気などに関連する遺伝子情報を知らないことがもたらす不利益など、さまざまな問題が指摘されることとなった。

そこで、1980年代以降のアメリカでは、血縁がないことを事実として受け入れ、産みの親の存在を否定しないことが子どもの発達にとって有益であるという観点から、オープン・アダプションが急激に推進されるようになった。これまでに、オープン・アダプション、とくに“完全に開示された”縁組において、産みの親に対する育て親の共感が増すこと、迎えられたことを子ども自身が理解するのが容易になること、クローズド・アダプションに比べて児童期以降の問題行動が少ないこと、などが報告されている（Grotevant, McRoy, Elde, & Fravel, 1994; Wrobel, Ayers-Lopez, Grotevant, McRoy, & Friedrich, 1996）。また、育て親が示す特徴として、迎えた子どもや産みの親への共感性が高く、縁組について子どもと話すことが頻繁で、自分たち家族のあり方について子どもが理解できるように行き届いた配慮をすることなどが実証さ

れている（Grotevant et al., 1994）。さらに、子どもが、出自についての情報量や大人同士（育て親と産みの親）の交流に参加する機会が多いと感じているほど、産みの親について関心を抱き自分の立場を理解している傾向が高いという結果も得られている（Grotevant & McRoy, 1998）。近年行われた研究結果をみる限りでは、少なくともオープン・アダプションよりもクローズド・アダプションのほうがよいとする結果はなく、縁組の当事者たち（産みの親、育て親、子ども）がオープン・アダプションを自分たちで選択した場合は有益であるといえそうである（Brodzinsky & Pinderhughes, 2002）。

一方、わが国では、クローズド・アダプションが依然として主流であり、オープン・アダプションの効果については、ほとんど検討されていない。一般に、産みの親の存在は、育て親にとっては「忘れてしまいたい存在、或いは、完全に縁を切ってしまいたい存在」として語られることが多い（家庭養護促進協会、1998）。また、「子どもを育てる義務を果たせない母親は産むべきではない」という社会規範が強いわが国では、予期しない妊娠の責任をとる方法として、子どもの命を守る養子縁組よりもむしろ中絶が想定されているとさえいえるだろう。いわば社会規範に「背いた」産みの親の立場はたいへん弱いのである。

2) NPO環の会

このような現状の日本においてもオープン・アダプションを実践しているNPOがある。東京都内に事務局をおくNPO環の会は、予期しない妊娠や出産で悩む人の相談を受け、産みの親がどうしても育てられない場合に、子どもの福祉を最優先した縁組を支援している。環の会の縁組は、子どもが欲しい夫婦に子どもを与えるためのものではない。育て親は、子どもの年齢や性別、性格、障害の有無など、子どもに条件をつけることは一切許されず、子どものありのまますべてを受け入れることが求められる。産みの親は、（中絶することもできたのに）子どもを産み、守り、その幸せを誰よりも願って環の会に辿り着いた存在とし

て、育て親を決める過程にも参加し、縁組成立後も環の会を通じて育て親家族とコミュニケーションを保つことができる。

3) テリング (tell+ing)

環の会では、子どもの出自を知る権利を守り、親子の信頼関係を築いていく上で、テリングを重要視している。テリングとは、育て親が産みの親の存在や子どもの出自にかかわることがらを日常の中で子どもの発達に応じて伝え続けて、子どもの理解を形成し、また、子どもの思いに耳を傾け続けることである(環の会、2004)。環の会では、日本の養子縁組において一般的な「真実告知」という言葉を使わない。子どもの出自にかかわることがらは、ある日突然打ち明けるものではないと認識されているためである。

育て親は、テリングを通じて子どもに、(a) 出自に関わる事実(産みの親が自分たち育て親とは別に存在していること、自分たちには産むことができなかったこと)、(b) 産みの親の思い(子どもの命を守り抜いたこと、子どもの幸せを考えて環の会を探し、育て親である自分たちに託してくれたこと)、(c) 育て親である自分たちの思い(迎えることを心から待ち望んでいたこと、かけがえのない存在として愛していること、産みの親に感謝していること)を伝えようとしている。すなわち育て親は、テリングを通じて、産みの親が別に存在しているという事実を単に伝えるだけでなく、産みの親、育て親をはじめ、子どもに関わる人たちの「思い」を伝えたいと考えている(環の会、2008)。

産みの親の存在を子どもに伝え始める適期について、例えば、里親・養親の支援に関する膨大なノウハウを蓄積してきた家庭養護促進協会(2004)は、3歳くらいから就学前が、話を始める最初の時期と述べている。しかし環の会では、子どもが何歳であっても、迎えた時からテリングを始めることを推奨している。環の会の縁組は、すべてが産みの親の相談から始まるため、子どもの多くが生後間もない新生児・乳児であり、古澤・富田・石井・塚田・城・横田(2004)によれば、

育て親の6割近くが、子どもが3歳になる前からテリングを行っている。

4) 本研究の目的

筆者は、意識的努力をもって創り出されていく家族において、子どもがごく幼い時期から行われる育て親のテリングが、子どもの自己理解、親子関係理解をどのように築き深めていくのか、また、育て親の成長や親子関係の発達にどのように影響していくのかを明らかにしたいと考え、環の会の育て親たちの協力を得て、縦断的な調査を実施してきた。

本研究では、関心相関性を中核原理に据えた構造構成的質的研究法(西條、2007, 2008)をメタ研究法として、ある育て親(母親)・雅代¹さんの語りを解釈的に分析することにより、テリングを通じて子どもが「産みの親が育て親とは別に存在する」ことを理解していくプロセスを探索していく。同時に、そのプロセスに関わる育て親の思いや親子関係の変化についても考察する。

2. 方法

1) 研究協力者

環の会を通じて子どもを迎え育てている母親・雅代さん。雅代さんは子宮がんのために29歳で子宮摘出手術を受け、妊娠・出産の可能性がない。33歳で拓也くん(当時生後2か月)を、35歳で智也くん(生後3か月)を、37歳で由紀ちゃん(生後8か月)を迎えた、3児の母である。

雅代さん夫妻は、拓也くんの産みの母親に会ったことはないが、迎えた直後に、生後1か月頃までの育児日記と直筆の手紙を、環の会を通じて受け取っている。智也くんや由紀ちゃんの産みの母親たちには、環の会スタッフ立会いのもとで子どもを迎えた時に会い、その手から直接託されている。迎えた後も、夫妻からは2か月～半年に1回くらいのペースで、子どもたちや家族の写真に手紙を添えて、産みの母親たちに送っている。

夫妻は、それぞれの子どもを迎えたその日から、テリングを始めた。産みの母親たちは、「お腹のママ」あるいは「春子ママ」といった実名で呼ば

れ、子どもたちと日常共に過ごす時間が長い雅代さんが主な担い手となって、入浴中や就寝前など、日々の暮らしの中で機会あるごとにテリングを行っている。

2) 語りデータの収集

筆者は、2005年10月から、2～3か月に1回のペースで雅代さん宅を訪れ、インタビューを行っている。インタビュー開始にあたっては、研究内容や発表のかたちについて説明し、十分なインフォームド・コンセントを得ている。

初回インタビューでは、家族状況やテリングについての夫妻の考え、これまでのテリングの進捗についてお話をいただいた。その後は、前回の訪問からの間に生じたテリングに関わる「エピソード」と「その時に感じたこと」、「その時の子どもの様子」、「その後の子どもの様子」、「夫婦で話合ったことから」「今、感じていること」などについて、雅代さんの育児日記を参照しながら自由に語っていただいている。インタビューに要する時間は、1回あたり概ね1時間半前後である。インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音し、インタビュー終了後直ちに書き起こして文章データ化して、KJ法に準拠しその傾向を探っている。

本研究では、拓也くんへのテリングに関わる雅代さんの語りに焦点をあて、拓也くんを迎えてから小学校入学前（6歳8か月）までのデータを取りあげるⁱⁱ⁾。1事例のみについてのデータではあるが、構造構成的質的研究法においては、事例数や具体例数がどれだけ必要であるかは、研究者の関心と相関的に決まるとされている。本研究では、テリングを通じて子どもが「産みの親が育て親とは別に存在する」ことを理解していくプロセスの探索が目的であるので、一人の子どもへのテリングについての縦断的なデータに基づく検討は、十分な意義を持つと考える。

3. 結果と考察

研究目的に照らして関心相関的にデータを抽出し、〈拓也を迎えた日についての語り〉〈初期のテ

リングについての語り〉〈テリングに対する拓也の拒否反応についての語り〉〈智也を迎える経験による拓也の展開についての語り〉〈智也の産みの母親との出会いによる拓也の展開についての語り〉〈日常会話の中のテリングについての語り〉〈産みの親や血縁者の存在についての拓也の認識についての語り〉〈産みの母親に関わる拓也の感情表出についての語り〉に分類した。各分類グループ内でデータを時系列に並べ、番号を付けて、Table1にまとめた。これらのデータを解釈的に検討していく。

1) 拓也くんとのお会いとテリング

雅代さんは、乳児院で拓也くんと初めて出会った瞬間から母親になったことを強く自覚し、穏やかな雰囲気の中で自然な感情の発露としてのテリングを始めている（Table1①③、以下データ番号のみ記す）。

環の会では、スタッフ立会いのもとで産みの親から直接育て親の手に子どもを託すケースも多いが、雅代さん夫妻は、拓也くんの産みの親に会うことはできなかった。しかし、産みの母親の心情を環の会スタッフから伝えられていた雅代さんは、拓也くんの命をもたらしてくれた存在に対する深い感謝と、その命を託された責任を感じている（②）。

2) テリングの進捗

(1) 練習、素直な感情表出としてのテリング

雅代さんは、拓也くんと暮らす日々の幸福感の中で、ほぼ毎日のようにテリングをしている（④）。この時期のテリングは、拓也くんの理解を期待しているわけではなく、拓也くんの反応も感じられてはいない。富田・古澤・石井・塚田・城（2004）では、育て親たちが、子どもが幼い時期のテリングだからこそ「理解できるだろうか」「傷つけるのではないか」といった不安が少なく、産みの親の存在や自分たち親子の出会い、迎え育てている喜びなどを素直に表現できることを示した。伝え続けること、口に出すことそのものに、育て親自身にとっての意味もあることを、雅代さんの語り

から読み取ることができる (⑤)。

(2) 拒否的反応の現れ

雅代さんがテリングに対する拓也くんの反応を初めて感じたのは、拓也くんが生後11か月の時だった (⑥)。夫妻は拓也くんの反応に「テリングに対する拒否」を感じて、テリングを控える配慮をしている (⑦)。

子どもがテリングを拒否する (ように見える) 時期の存在については、他の育て親たちへのインタビューでも語られる傾向があり、その原因の検討が必要である。考えられる可能性としては、(a) 親の語りのリズムや表情が通常の語りと異なり、子どもに違和感を感じさせるため、(b) 子どもの理解を期待せずに語られることで、語りの質が一方的で閉ざされたものになるため、(c) 何度も繰り返し同じような内容を話されることに子どもが抵抗を感じるため、といったことが予想される。いずれにしても、子どもは、前言語期であっても、親の態度を参照したり、語りのリズムなどをとらえながら、テリングに反応していると考えられる。

(3) 弟を迎える経験による展開

拓也くんの拒否的反応が変化するきっかけは、拓也くんが2歳の時、雅代さん夫妻に第2子を迎える可能性が生じたことによってもたらされた (⑧)。

雅代さん夫妻と拓也くんは、拓也くんを迎えた時と同じ乳児院へ智也くんを迎えに行き、環の会スタッフ立会いのもと、産みの母親の手から直接智也くんを託された。さらにその後、智也くんの特別養子縁組の審判にあたって家庭裁判所が産みの母親の同意確認を行った際、拓也くんは、雅代さんと智也くんと共に、智也くんの産みの母親に再会し、ひとときを過ごした。智也くんを迎えるプロセスを父母と共に体験し、智也くんの産みの母親にも会ったことが、拓也くんに大きな変化をもたらしたと雅代さんは考えている (⑨～⑭)。拓也くんにとっては、これまで育て親からある意味では一方的に与えられていた自分自身の出自

に関わることがらを、まさに具現化する経験だったのではないだろうか。そして拓也くんによいような変化が生じたということは、智也くんを迎えずずっと以前から、拓也くんがテリングを自分なりに受けとめ、泣いたり不機嫌になったりといった形で不安定な情緒を表出しながらも、語られる内容を心の中に位置づけようとしていたことを示している。また、智也くんの産みの母親が拓也くんを優しく気遣ってくれたことによって、記憶にない自身の産みの母親像に対する不安が解消され、安心感が得られたのかもしれない。

そして、雅代さんもまた、智也くんの産みの母親に会ったことによって、自分たちにとっての「産みの母親」という存在の意味を、産めなかった自分たちとの対比からくる葛藤も含めて、改めて深く感じ取っている (⑮)。Grotevant et al. (1994) は、オープン・アダプションにおいては育て親の産みの親に対する共感が増すこと、子どもが養子であることを理解するのが容易になることを報告したが、雅代さんの語りにも同様の傾向が示されている。

智也くんを迎えるという絶好の機会が、拓也くんの「産みの母親の存在」についての理解を促した。また、育て親からの一方向的なテリングが親子間の双方向的なものへと変化するきっかけになったといえるだろう。

(4) 理解状態や心情の表出

その後、日常生活の中でのテリングは双方向性を深めながら続き、雅代さんは、次第に気負いがとれた自然体のテリングができるようになったと語っている (⑯～㉔)。また、拓也くんの言語発達が進むにつれて、「産みの親が育て親とは別に存在する」ことを理解している程度やテリングの影響性を読み取ることができるエピソードが増えていく。

(a) 「みんな、ママが2人いる」

4歳5か月時点の拓也くんは、誰にでも産んでくれた母親がいること、そして、自分には「ママが2人いる」ことは理解出来ていたが、それが他

Table 1 拓也くんへのテリングにかかわる雅代さんの語りⁱ**<拓也を迎えた日についての語り>**

- ① あまりに小さくて、もうドキドキして、でも会った瞬間に... 母親になっていました。ものすごく嬉しかったし、責任の重さも感じました。しっかり育てなくちゃって気持ちで、最初はすごく強かったと思います。 [0:2]ⁱⁱ
- ② (産みの母親は) ずっと泣いていたそうです。拓也が生まれてから2か月の間、必死で守ってくれて、私たちに気を遣わせてしまうから会えない、会えませんかって言って下さったお母さんだったんです。産まない選択もできたはずなのに、産んでくれた、守ってくれた。ほんとに、感謝です。感謝しかない…。泣いていたお母さんに笑ってもらえるように、よかったって思ってもらえるような育て方をしなくちゃって、なんだか気負い過ぎていたところも、今考えるとあったかなと思います。 [0:2]

<初期のテリングについての語り>

- ③ 迎えた日は、「はじめまして」から始まって、「会えて嬉しいよ、会いたかったよ、お腹のママが産んでくれたんだね、生まれてきてよかったって思えるように、一緒に生きていこうね」って。そんな話をずっとしていたような気がします。拓也はずっと寝ていました。拓也も私たちも、なんだかすごく穏やかだったな…。 [0:2]
- ④ もうめっちゃくちゃかわいくて、毎日、ほとんど(下に)下ろさないで一日中抱いていたって感じです。主人と取り合っていました。写真やビデオも毎日撮って、写真がない日がないくらいです。夢のような日々でした。抱っこしながら、毎日、(初めて会った時と) 同じようなことを話していました [0:2]
- ⑤ 練習のつもりっていうか、私が言いたいから言うっていうか。わかると思っているわけじゃなくて、ただ、言いたいから。それに、いつも言っていればそれが当たり前になるっていうか、これから先何か聞かれたりしても、ちゃんと話せるんじゃないかと思います。 [0:2]

<テリングに対する拓也の拒否的反応についての語り>

- ⑥ ずっと同じようなことばかり話してきたんですけど、今までのように話すと、泣くようになったんです。あと、夜泣きをしたり、ぐずったり。嫌がるっていうか、もういいの! みたいな。ことばはまだ全然話せないけど、なんかこう、首を振ってみたりとか、機嫌が悪くなるとか、そういう素振りをみせるんです。 [0:11]
- ⑦ 何か感じているんじゃないか、今は聞きたくないっていうことがあるんじゃないかって(夫婦で)話し合っ、とりあえず、(産みの母親に) 写真を送る時に、「これ見せてあげたいね、きっと喜ぶよ」なんて話すくらいにして、お腹のママがいるとかっていう言葉は控えるようにしました。 [0:11]

<智也を迎える経験による拓也の展開についての語り>

- ⑧ (環の会から) 「2人目は?」って話がきたんです。それで、拓也に、「赤ちゃんが来るかもしれないよ」って話をし始めたら、なんだか吹っ切れたみたいで。全く嫌がらなくなりました。それからはずっと「赤ちゃんが来るかもね」って話したり、少しずつ(以前と同じようなことを) 話すようになりました。 [2:0]
- ⑨ (乳児院で) 「拓也もこの部屋覚えてるかな、拓也のこともこうやって迎えに来たんだよ、パパとママと2人で来たんだよ、ずっと会いたくて、そしたら拓也が来てくれて、すごく嬉しかったよ、智也もパパとママと拓也をずっと待っていてくれて、今日こうやって会えて、すごいね、4人家族になれたよ」って話しました。「智也を産んでくれたママにも会えてよかったね、お腹のママがいたからこうやって家族になれたんだね、拓也にも産んでくれたママがいるんだよ」って。拓也は、うん、うん、って、ちょっとうれしそうだったかな。私たちの真似をして(智也に) 「(会えて) よかったね」なんて言ったりもしていました。 [2:4]

<智也の産みの母親との出会いによる拓也の展開についての語り>

- ⑩ (智也を迎えた時には) 産んでくれたお母さんにも会えたんです。それに、お母さんが拓也にすごく気を遣って下さって、「お兄ちゃん、お願いしますね」とか言って下さったんです。その時に、お腹のお母さんっていう人がいるんだっていう感覚がつかめたというか、心の中で理解できたのかなって

感じがしました。 [2:4]

- ⑪ 帰りにちょっとだけ（智也の産みの母親と）お茶したんです。「智也を産んでくれたママだよ、お腹のお母さんだよ、智也を産んでくれたからこうやって一緒にいられるね」って話しました。（産みの母親と別れて3人で）家に帰りながら、「会えてよかったね、智也を産んでくれて、ママ感謝でいっばいだよ。ママは拓也と智也のママだけど、産んでくれたママもママなんだよ、拓也のことも智也のこともすごく好きで、すごく幸せになって欲しいって思っているんだよ、今日会えて、ママすっごくそう思ったの！」って、そういう話を帰り道ずっとしていました。 [2:9]
- ⑫ 駅のホームを降りていたら、智也のお母さんが向こう側のホームにいて、それを拓也が見つけて、「あっ、智也のママ！」って叫んで、「バイバーイ！」なんかして、その後にぼろっと（智也に）言ったんですよ、「智也、よかったね、智也のママはかわいかったね、会えてよかったね、みんなで会えてよかったね」って…。もう私も、わぁって思って、ぼろぼろって（涙が）…。 [2:9]
- ⑬ その日の夜、（仕事の都合で同行できなかった父に）「会ったんだよ、かわいかったよ」って（拓也が）また話していました。「よかったね、拓也のママもきっと（拓也のことを）思っているからね、いつか会いたいね」って言ったら、「会いたいねえ」って。深くは考えてないかもしれないですけど、まだ2歳だから（どの程度真剣に会いたいと思っているのか）計り知れないですけど、会いたいって言いました。 [2:9]
- ⑭ やっぱ、お腹のママがいるってことをほんとに受け入れられたと思うんです。お腹のママに会ったからといって（自分の）生活が変わることがないってわかって、何か漠然と感じていたような不安もなくなったんじゃないかな。それから（拓也が）変な顔をしている写真なんかがあると「春子ママに送ってあげようよ！」「えっ、こんな写真、送るの？」みたいな、笑いながらそんな風に話せるようになりましたね。テリングをするとぐずるとか、後で夜鳴きをすとかいうのも、全くなくなりました。 [2:9]
- ⑮ （産みの母親が）智也を抱っこしてくれた様子とか見て、私の中にも、ああ、ほんとにこの人が産んでくれたママなんだ、私もママだけど、やっぱり産んでくれた人もママなんだって、そういう考えがすごく湧いてきました。私にも（産んでくれた）親がいるみたいに、子どもたちにも（産みの）親がいる、お腹のママが幸せじゃなかったら子どもたちも幸せじゃない、みんな家族だってすごく思いました。私が産みたかったとは思うけど、この子たちじゃなきゃ嫌だし、この子たちを産みたかったっていう思いもあるけど、やっぱり産んでくれたお母さんが、…やっぱり家族っていう言葉しかないと思います。 [2:9]

<日常会話の中のテリングについての語り>

- ⑯ 近所の方がおめでたで、お腹が大きいんです。それで、「こんなに大きくなってすごいでしょ、拓也のママも一生懸命お腹の中で育ててくれたんだよ、大きくなあれって言ってくれてたんだよ」って。まだ3歳くらいだと、お腹のママっていっても結局よくわからないというか、生まれるとか産むとかってこと自体がたぶんわからないんで、そんな時にちょうどいいタイミングで、赤ちゃんはお腹の中にいるんだ、大事にしてるんだってよくわかるじゃないですか。だから、「こうやって大事にしてくれていたんだね、よかったね」って話すと、拓也は「へへっ、そうだったんだ…」って感じで、照れています。 [3:0]
- ⑰ うちのビデオは、拓也すごい！できるね！すごいね！って私がかきあきあ言いながら撮ってるビデオばかりなんです。それを拓也と一緒に見ながら、親ばかだね、ママ親ばかなんだよ、でもすごく会いたかったんだもん、みたいなことを言っていたら、「（自分も）パパとママに会いたかったんだよ」って（拓也が）言ってくれて。そういうこと言ってくれたのは初めてで、すごくうれしかったです。 [3:3]
- ⑱ 例えば、歯科検診で虫歯がなかったら「すごいね、虫歯がないのはママが頑張って産んでくれたからだよ」とか、ウンチをトイレで出来るようになったら「ママ手紙に書けちゃうよ、ママもパパも嬉しくて泣いちゃうけど、春子ママも泣いちゃうよ」とかって話します。そういう時、拓也は照れ屋だから「えへへ」とか言っています [3:6]
- ⑲ やっぱ最初はすごく気負っていたんですね。迎えた当初は、言わなきゃっていう気持ちがとてもあっ

たんですね。でも嫌がる時期があって、無理してもだめだ、本人の様子を見ながらにしようって思って、それから智也を迎えたら（拓也へのテリングが）すぐく進んで、今はもう全然、拓也には完全に自然に話せています。 [4:4]

- ②⑩ 拓也を叱った時、「春子ママがママになるからいいよ！」って言われたんです。むかつく！逃げに使われた！って感じ。でも、そういうことも言える親子関係が出来ている証拠だって思ってもいますけど。 [4:5]
- ②⑪ 拓也が由紀に時々そっと「産んでくれてよかったね」「拓也が守ってあげるからね」なんて言ってるんですよ。私に見られているって気づかずに…。なんだか、じんとききました。 [5:1]
- ②⑫ 小児科で由紀が（特別養子縁組成立前のため拓也たちの姓とは異なる）「田中さん」って呼ばれたとき、「なんでだよ！」ってすごく怒ったんです。「怒らないでね。由紀のお腹のママの名前なんだよ。拓也が池田になったみたいで、由紀も池田になるから待っていてね」って話しました。ずいぶん怒っていましたが、わかったみたいで、その後、俺は何だったのとか智也は何だったのとかって、しばらく話が続きまして。 [5:5]

<産みの親や血縁者の存在についての拓也の認識についての語り>

- ②⑬ 買い物に行った時、急に拓也が大声で「みんなママは2人しかいないからなあ！」って言ったんですよ。えっ、何を言ってるの？って。「違うよ、みんなじゃないでしょ、環の会のお友達はそうだけど、みんなじゃないんだよ」って。「えっ、そうなの？」なんて言っていましたが、びっくりしました。これからは、大事とか大好きとかっていう私たちの話だけじゃなくて、少しずつ、周りとかちょっと違うことだって話もしていかななくちゃいけないのかな、視線を外に広げていかななくちゃいけないのかなって思います。 [4:5]
- ②⑭ 「パパも2人いるんだよ」って話したら「えっ？何？」って。パパが2人ってこと、考えてもいなかったみたいで。全然わからないんですよ、話してもぴんとこないみたいでした。 [5:2]
- ②⑮ 突然、「パパはいるの？」って。「パパ？（うちの）パパのこと？」って言ったら、「お腹のパパはいるの？」って。「もちろんいるよ。なかなか会えないけれど、会いたい？」って言ったら、「別に」って、それで終わりで、その後、また聞かれるってことはないんですけど。最近幼稚園で、パパとママがいて子どもがいるとか、結婚したら赤ちゃんが生まれるとかって話が出たって聞いたので、たぶんそのつながりだろうと思いました。 [5:7]
- ②⑯ 急に拓也が「おれひとり？」「きょうだいもいるの？」って聞いてきたんです。（拓也には血縁のある兄がいるが、その存在を話したことがなかったの）どう答えようか迷ったけど、「お兄さんがいる」って言ったら、「わかった！（環の会の集まりでよく遊ぶ、拓也が慕っている）幸太郎くんがお兄さんだ！」って言うんです。「違うよ、幸太郎くんじゃないよ、でもいるじゃん、智也と由紀が拓也のきょうだいじゃん」って言ったんですけど。 [6:0]

<産みの母親に関わる拓也の感情表出についての語り>

- ②⑰ 「春子ママはどこにいるの？」って突然聞いてきました。「今はまだ遠いところにいるんだよ、いつか会えるといいね」って答えたら、「うん」って…。私は、拓也はやっぱり会いたいんだろうなって思います。 [4:5]
- ②⑱ 最近、前みたいに会いたいわないんですよ。智也や由紀のママには会いたいわないっていうんですけどね。何か不安が出てきたのかなって思います。 [4:11]
- ②⑲ 拓也はやっぱり、みんなにお腹のお母さんが別にいると思っているのか、「みんな、いるからね」って言い方をぼろっとするんです。でもナイーブなところがあるから、他の人と同じっていうほうが、本人が安心なのかもしれないし。「ママ（（雅代さんのこと））から生まれた」って言うから主人が「違うでしょ」って言ったらにやにや笑っていたりしたこともあります。 [5:0]
- ③① （テリングが）赤ちゃんの頃のようにはいかなくなってきましたね。これから、拓也次第ですけど、拓也がどんなふうに理解して、どう疑問を持って、どう悩んでっていうのが出てくると思うんですけど、その時その時、いいと思う方法でやっていくしかないと思っています。 [5:0]
- ③② 七五三の写真を送ってあげようって話をしていたら、「春子ママは死んじゃったの？」って聞いてきたんですよ。急にそんな言葉が出て、びっくりしました。だから「生きてるよ」って。「近くにはい

られないけど、生きてるよ」って答えたら、「会いたいな」って。智也や由紀のママには会ったけれど自分のママには会ったことがないし、覚えてないし、だからいないんじゃないかって思ったみたいです。「じゃあ今度のお手紙に、会いたいって書いてみる？」って聞いたら、「うん」って。それで、「会えないかもしれないけど、会いたい気持ちは伝えてみようね」って話をしたんです。 [5:4]

- ③② 主人は、拓也は周りのことをよくみるようになってきてはいるけど、でも、自分が周りと違うとかっていうのは、全然思っていないんじゃないかって言います。私は、環の会のお友達にはママが二人いるけど幼稚園のお友達は違うよって話をしちゃってるから、拓也はたぶんわかっていないんじゃないかと思うんですけど、主人は、そういうことを私が平気で言い過ぎる、ことばを上乗せするだけになって、本当にわかっていることにはならない、拓也が「会いたい」っていうのも私がそうやって聞くからだって言うんです。本当はどう思っているのか、拓也に聞きたい気もするけど…まあ、そこはあまり深く追求してもあれかな、と思って。 [5:5]
- ③③ 「(智也の産みの母親の) 夏美ママは自分のママだ」って、拓也が智也とけんかしたんです。「夏美ママは智也のママでしょ、拓也は春子ママでしょ」って言ったんですけど。やっぱり実態が欲しいのかな。 [5:7]
- ③④ (母子4人で一緒に寝ている時) 拓也が眠れないみたいな感じで、「そういえばさあ、春子ママはどこにいるんだろうね」ってまた言ってきて。「会ってみたいの？」って聞くと、「会ってみたいけど、うーん、うーん」って、興味いっぱいだけど不安もあるみたいな感じで。聞いてはくけど深い話になるのを避けるような、「(環の会職員の) 横田さんに相談してみる？」って聞くと、「いや、いいよ」って…。 [5:10]
- ③⑤ やっぱり形が欲しいのかな。写真とか、会うとかってことがあると、拓也にも、テリングする私たちにも、何か形ができるような気がします。小学生になると‘誕生’をテーマにした授業もあるっていうし、出来れば入学するまでに会わせてあげられたらって思う。拓也『の名前の由来も聞いてないし、春子ママの思いをもっと伝えてあげたい。会っていないからイメージが膨らんじゃってたいへんなんじゃないかな。まだ早いかもしれないけど、その時その時で、葛藤をクリアしてあげたい、葛藤にあった回答をしていきたいんです。 [5:10]
- ③⑥ 拓也が、とうとう春子ママに手紙を書きました。何を書くか悩んでいて、会いたいって書くのも、本人がすごく悩んでいて。会いたいって書くのはやっぱりなんか難しかったみたいです。私自身も悩んで、じゃあ、会いたいってというのはママの手紙に書こうかって。それで(拓也は)「元気です」って。ほんとに「げんきです。たくや」だけ書いたんですけど。 [6:4]
- ③⑦ (拓也の手紙に対して) 春子ママからお返事が来ました。それで、手紙はすごくうれしかったんですけど、やっぱりずっと病気の治療中で会えないってことだったんです。拓也には「春子ママも拓也に会いたいんだけど、今はちょっと会えないんだよ、だから一緒に元気になるようにお祈りしようね、元気になったら会えるから、それまで待ってようね」って話したら、「別に」って、そっけなく。でも、ほっとしたような残念なような、どっちともって感じで…。たぶん、会うプレッシャーも会わないプレッシャーも、両方あったと思います。私は、拓也の普段の様子から、やっぱり会いたいのかな、確認したいのかなって思っていたし、できれば小学校に入る前に会わせてあげたい気持ちが強かったんですけど。でも、病気なのに会いたいなんて言って、(産みの) お母さんに辛い思いさせちゃったかなって気になって、これからも悩むかもしれません。 [6:5]
- ③⑧ (春子ママから会えないと返事が来てから、拓也が) 会いたいって言わないんです。やっぱり納得したんでしょうか、全然言わなくなりましたね。今は会えないんだ、会えるようになるまで待ってればいいんだっていう感じじゃないかと思います。私は、(産みの母親が) 病気の中でもがんばって手紙を書いて返してくれたってことがすごいことだし、絶対会えるよっていうふうに言いながらも、でも、ずっと会えないかもしれないし、そうしたらどうするんだろうって思うこともあります。 [6:8]

注 i データは、倫理的配慮による修正を加えた上で、読みやすさを考慮して適宜まとめて記述している。
 ii 語られたエピソードや感情が生じた当時の拓也くんの年齢を[年：月]の書式で表す。即ち[0:2]は、当時生後2か月であったことを意味する。
 iii 環の会では、多くの場合、産みの母親が子どもの名前をつけている。

者と異なることだとは理解していなかった(23)。「ママが2人いる」という状況が身近な智也くんや由紀ちゃんにも共通しており、また、こうした話題は家族や環の会の集まり以外で触れる機会があまりないため、「みんな、ママが2人いる」と、無条件に信じていたのだろう。これは幼児期の思考の特徴である自己中心性の現れともいえるが、発達段階的にも他者のメタ認知を理解できるようになりつつある時期のこのようなエピソードは、拓也くんが、他者との対比の中で自己理解・親子関係理解を深めていく段階に入ったことを感じさせる。雅代さんも、テリングに他者との対比の視点を取り入れていく必要性を感じている。

(b) 「お腹のママに会いたい」

拓也くんは、智也くんの産みの母親に会った日に、父母の問いに答える形で産みの母親に「会いたい」と初めて発言したが(13)、4歳を過ぎた頃からは、産みの母親について自分から尋ねたり、「会いたい」と言ったり、複雑な態度をみせることが増えてきた(27~29、31、33、34)。産みの母親の存在を理解した上で、改めてその実像を求め始めたのではないと思われる。どこかにいるのならばなぜ会えないのか、いったいどんな人なのか、会うことの出来た智也くんや由紀ちゃんの産みの母親のイメージはあっても、自身の産みの母親のイメージがつかみきれない拓也くんの揺らぎが感じられる。

こうした拓也くんの態度について、雅代さん夫妻は、テリングの不安や葛藤、迷いも感じつつ、夫婦で話し合いながら、拓也くんの揺らぎを受けとめようと努めている(30、32、35)。また、拓也くんが「会いたい」気持ちを伝えられるように手紙を書くことをサポートしたり、今は会えないと知った拓也くんの気持ちや産みの母親の状況、今後の展開に思いを寄せている(36~38)。

環の会では、育て親家族と産みの親側との交流はすべて会を通して行われ、双方のニーズが一致して初めて「会う」ことが可能になる。今後のテリングの進捗では、拓也くんが産みの母親に会うのか(会えるのか)どうか、大きな影響を与え

ると予想される。

(c) 「パパはひとり」?

5歳2か月時点の拓也くんは、「産みの父親」の存在に気づいていなかった(24)。その後、拓也くんは、5歳7か月時点で自ら初めて、産みの父親について尋ねている(25)。ちなみに拓也くんは、6歳時点で、血縁のあるきょうだいがいる可能性にも気づいている(26)。

環の会の幼児期の子どもが、まず「ママは2人、パパはひとり」という認知を表出する傾向は、他の育て親へのインタビューでも語られている。育て親が得ることの出来る産みの父親についての情報は、産みの母親に比べると圧倒的に少なく、事情も様々である。情報の量的・質的な差がテリングの量的・質的な差を生み、その結果、産みの父親はじめ血縁者の存在への気づきと理解が、母親についてよりも遅れると考えられる。

拓也くんが自分の存在に関わる他者の存在についての認識を少しずつ広げようとしている一方で、雅代さん夫妻は、今後も産みの父親や兄についての情報がほとんど得られないことがわかっているため、どのように話していくのかを決めかねているのが実情である。

(d) 妹への“テリング”

拓也くんが4歳6か月の時、雅代さん夫妻は、環の会から第3子を迎える意思があるかと尋ねられた。迎えて育てたいという思いと周囲の反対との間で悩む雅代さんを、拓也くんは「赤ちゃんは拓也が守るから大丈夫だよ」といって励ましたという。そして、由紀ちゃんを迎えて家族5人の生活を送るようになった中で、雅代さんは、拓也くんがみせる態度や由紀ちゃんに「テリング」する様子に、感じ入っている(21、22)。拓也くんが由紀ちゃんに「テリング」するという現象は、雅代さん夫妻の模倣とも捉えられるが、たいへん興味深い。拓也くんが発する「守る」ということは、雅代さん夫妻がテリングにおいて「産んでくれたお母さんが守ってくれた命を大切にしていこう」と語っていることにつながっていると考えられる。

由紀ちゃんの命を産みの母親から託された家族の一員としての自負心が、拓也くんの中で芽生えているのかもしれない。

4. まとめと今後の課題

以上、雅代さんの語りを通して、拓也くんがテリングによって「産みの親が育て親とは別に存在する」ことを理解していくプロセスを探索した。

拓也くんの発達に伴って、テリングは、育て親からの一方的なものから、親子間の双方向的なものへと変化していった。さらに、弟や妹を迎えるといった経験が、産みの母親の存在や自分自身が育て親のもとに迎えられたことについての理解を深める重要な機会となっていた。また、産みの母親が育て親とは別に存在するとわかっても、それが他者とは異なる状況であると気づいているわけではないこと、周囲との違いに気づき始めることによってテリングに関わる態度が複雑化し、不安や葛藤が芽生えていると推察されること、産みの父親の存在に気づく時期は産みの母親に比べて遅れること、なども明らかになった。

今回見出されたプロセスは、拓也くん固有のエピソードで構成されているものではあるが、個性を超えて他者にも共通する心理発達プロセスとして理解できる点も多い。今後、さらに多くの実証的・縦断的な事例を積み重ねて、グラウンデッド・セオリー・アプローチや複線径路・等至性モデル（サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー，2006）などを参考に、理論化を進めていきたい。

また、先述のように、環の会の育て親たちは、テリングを通じて、「産みの親が別に存在している」という事実を単に伝えるだけではなく、産みの親、育て親をはじめ、子どもに関わる人たちの「思い」を伝えたいと願っている。こうした「思い」を、子どもがいつどのように理解していくのかについての検討も、今後の重要な課題である。もちろんそのためには、子どもたち自身への質的な調査が必要である。

ひとがアイデンティティを形成していくプロセスにおいては、社会の中で他者と関わり、他者との対比によって自己を際立たせていくことが必然

である。現代社会においてなお残る、血縁によらない親子関係において育つ子どもたちの「生きにくさ」に寄り添い、アイデンティティ形成を支えていく発達支援システムの構築を、将来の課題としたい。

〈付記〉

本研究の一部は、平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「非血縁家族が育む家族機能と子どもの親理解・自己理解」（研究課題番号17530490）（研究代表者：富田庸子）の助成を受けた。

調査にご協力いただいた雅代さんご家族と環の会に、心より感謝申し上げます。

-
- i 本稿において登場する育て親家族や産みの親に関わる個人名は、すべて仮名である。個人が特定されないように、年齢等の情報は限定して記述している。
 - ii データ総量は合計11回分・16時間28分であった（智也くん、由紀ちゃんへのテリングについての語りも含む）。

引用文献

- Brodzinsky, D.M. & Pinderhughes, E.E. (2002). Parenting and child development in adoptive families. M. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting: Vol. 1. Children and parenting*. (2nd ed.) 279-311. Lawrence Erlbaum Associates.
- Grotevant, H. (2000). Openness in adoption: Research with the adoptive kinship network. *Adoption Quarterly*, 4 (1), 45-65.
- Grotevant, H. & McRoy, R. (1998). *Openness in adoption: Connecting families of birth and adoption*. Sage.
- Grotevant, H., McRoy, R., Elde, C. & Fravel, D. (1994). Adoptive family system dynamics: Variations by level of openness in the adoption. *Family Process*, 33, 125-146.
- 家庭養護促進協会. (1998). 養親希望者に対する意識調査－「養子を育てたい人のための講座」受講者へのアンケート調査報告. 家庭養護促進協会神戸事務

所。

家庭養護促進協会。(2004). *里親が知っておきたい36の知識—法律から子育ての悩みまで*. 家庭養護促進協会神戸事務所.

桐野由美子。(1998). 意識調査を通してみた日本の子どものための養子縁組 その1:当事者と非当事者の比較. *関西学院大学社会学部紀要*, 81, 129-141.

古澤頼雄・富田庸子・石井富美子・塚田-城みちる・横田和子。(2003). 非血縁家族における若年養子へのテリング—育て親はどのように試みているか?—. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 3 (1), 1-6.

西條剛央。(2007). *ライブ講義 質的研究とは何か S CQRMベーシック編*. 新曜社.

西條剛央。(2008). *ライブ講義 質的研究とは何か S CQRMアドバンス編*. 新曜社.

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン=ヴァルシナー。(2006). 複線径路・等至性モデル 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. *質的心理学研究*, 5, 255-275.

富田庸子・古澤頼雄・石井富美子・塚田-城みちる。(2004). 育ての親が生みの親の存在を子どもへ伝え続けること—その二 育ての親によるテリング—. *日本発達心理学会第15回大会発表論文集*, 115.

環の会。(2004). *環の会子育てハンドブック*. 特定非営利活動法人 環の会&サポーターズ.

環の会。(2008). 環の会が提唱している「テリング」に関する検討と提言. *独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業報告書*.

Wrobel, G., Ayers-Lopez, S., Grotevant, H., McRoy, R. & Friedrich, M. (1996). Openness in adoption and the level of child participation. *Child Development*, 67, 2358-2374.

要旨

血縁のない幼い子どもを迎え育てている家族において、育て親が子どもに、産みの親の存在や子どもの出自に関わることがらを伝え続けて子どもの理解を形成する試みを「テリング」とよぶ。

本研究では、育て親(母親)へのインタビュー調査を通して、子どもがテリングによって「産みの親が育て親とは別に存在する」ことを理解していくプロセスを

探索した。

その結果、(1) テリングが、子どもの発達に伴って、育て親からの一方向的なものから育て親—子ども間の双方向的なものへと変化すること、(2) 弟妹を迎えたり産みの親に会うといった経験が理解深化の機会になること、(3) テリングを嫌がる時期が存在すること、(4) 周囲との違いに気づき始めることによって子どもの態度が複雑化すること、などが示された。

(2010年10月4日受稿)